論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報告番号	博(医歯薬)甲第 891 号	氏名	北庄司　絵美

学 位 審 査 委 員	主　査　　柳原克紀 副　査　　橋爪真弘 副　査　　田崎　修

論文審査の結果の要旨

１　研究目的の評価
レプトスピラ症はネズミなどの哺乳類によって媒介されるスピロヘータ感染症で、発展途上国において公衆衛生上重要である。標準の確定診断法は、培養法と顕微鏡下凝集試験(MAT)だが、感度が低く、高度な検査設備を要するため、途上国の蔓延地域では実用的でない。本研究では、新規に開発した LigA 蛋白を特異的抗原とする IgM ELISA 法の診断精度について検証を行っており、目的は妥当である。

２　研究手法に関する評価
2011 年 11 月より 2013 年 9 月までに、フィリピン マニラの国立感染症病院において臨床的にレプトスピラ症を疑われた入院患者を対象とした。MAT・培養法に加えて LAMP 法を用いてレプトスピラ症の確定診断を行い、LigA-IgM ELISA 法の診断精度を評価した。また、LigA-IgM ELISA と LAMP 法によってレプトスピラ症を再定義した場合の臨床的特性を比較した。

３　解析・考察の評価
LigA-IgM ELISA 法は、特に感染早期において、診断精度が優れていることが実証された。また、LigA-IgM ELISA 法と LAMP 法によって診断された患者群は、従来法で診断された患者群よりも、レプトスピラ症の臨床的特性をより強く反映していることが判明した。以上のことから、発展途上国の臨床現場でより有用であると考えられた。

以上のように本論文は感染症学の研究に貢献するところが大であり、審査委員は全員一致で博士（医学）の学位に値するものと判断した。